

「自由人協会」とヘルバルト(3) : 1795年9月までの活動を中心に

タイトル(その他言語)	"Die Gesellschaft der freien Manner" and Herbart (3)
著者	杉山 精一
雑誌名	神戸外大論叢
巻	60
号	6
ページ	47-67
発行年	2009-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000745/

「自由人協会」とヘルバルト(3)

～1795年9月までの活動を中心に～

杉 山 精 一

「肉体と精神のある種の無気力さから、私は次第に目覚めつつあります。

私がここ（イエナ）にやってきてから、私の（学問への）取り組みは…大きく変化してきています。知識学は、無限の自我の場所を確保するために、はかりしれない空虚さを私の頭に作り出しました。」

（1795年8月28日、ハーレムあてのヘルバルトの書簡）⁽¹⁾

1. はじめに ～イエナの学生たち～

本稿の目的は、1794年イエナ大学で結成された学生団体、「自由人協会」の翌1795年9月までの活動に焦点をあて、教育学者ヘルバルト（J. Fr. Herbart, 1776-1841）がその若き日、どのような精神運動の「場」にいたのかを明らかにすることにある。

主人公は、イエナの学生たちである。

イエナ大学は、チューリンゲンの小領邦四カ国の共同管理という微妙な管理バランスの上に立ち、緩やかな管理もあって比較的自由的な雰囲気に満ちていた。⁽²⁾

1770年代に、ギーセンで大学生活を送ったラウクハルト（Laukhard, Friedrich Christian, 1757-1822）は、自伝の中で当時のイエナについて次のように述べている。

「イエナの学生たちがすべてよそ者に対して友好的であり、その客あしらいのよさが相当のものである点は認めてやらざるをえまい。こういうことは、ハレやエアランゲンではほとんどなく、ゲッティンゲン

にはまるでない。…(略)…また人間性を備えた君主の鑑であるヴァイマル公はリベラルなやり方で、イエーナの学生の考え方、生活態度を変えさせようと、しかも大学の自由は存続しうるように努めているとのことだ。』⁽³⁾

他大学に比べてリベラルな雰囲気を保ちながらも、一方でイエナは18世紀後半、「学生団体の牙城」「絶え間のない学生反乱の地」とも呼ばれていた。⁽⁴⁾

またラウクハルトは、当時ギーセンに持ち込まれた学生結社について、次のように述べている。

「私の大学時代の二年前、学生の結社がギーセンに持ち込まれていた。このばかばかしい団体はもともとイエーナで生まれたものだ…次第にそれはあちこちの町に忍び込み、すでに1778年にはドイツの大学の多くの大学が、殊にイエーナ、ゲッチンゲン、ハレ…(略)…などがそれに感染していた。イエーナの数名の者がいわゆる＜友情団 *Amicistenorden* ＞をギーセンに持ち込んだ。』⁽⁵⁾

こうした学生結社は学生の移動によって一気に他大学へと広がっていった。ラウクハルトも、イエナの学生とともにマインツで9人の学生を友情団に入会させたことを述べている。⁽⁶⁾

学生結社は大学内での地位向上を目的とし、社会変革や明確な政治的主張を持っていたわけではなかった。学生たちはけんか、決闘をくり返し、時には市民生活を脅かすほどの騒動を引き起こした。⁽⁷⁾ 規約や儀式によって固い団結で結びつき、問題を繰り返すこの結社は、イエナにおいて盛んだったのである。⁽⁸⁾

後にイエナ大学就任直後のフィヒテ (*Fichte, Johann Gottlieb*, 1762-1814) が対立したのは、知的探究とは無縁の伝統的な慣習の中で結成され、大学で勢力を拡大していたこの学生結社であった。

2. 三つの知的契機 ～ヘルバルト入学までの10年間～

ラウタハルトは1783年に再びイエナを訪問し、「10年前に私が見たものと変わらないと思った」⁽⁹⁾と語っている。だが、それから約10年後の1794年10月にヘルバルトがイエナ大学に入学するまで、学生たちに大きな精神的影響を及ぼした知的契機が三つある。

1780年代後半から、イエナの学生たちをとり巻く知の状況は、その発信源となる学術誌と新たな時代を予感させるスターの登場によって、大きな変貌を遂げる。それは、1785年の「一般文芸新聞」(Allgemeine Literatur-Zeitung)の創刊、1789年のシラー (Schiller, Johann Christoph Friedrich, 1759-1805)の就任講演、1794年のフィヒテの「学者の使命」である。

もちろん、イエナ大学発展の背景にはゲーテの大胆な人事政策、自然科学系の施設の拡充や整備などが大きく貢献している。⁽¹⁰⁾ けれども「今何を学び、何をなすべきか」を模索していた学生に、シラーとフィヒテは学ぶべき知の目的と普遍性を示したのである。

1785年に創刊された「一般文芸新聞」は、編集長のシュッツ (Schütz, Christian Gottfried, 1742-1832)によって、カント学派形成の機関誌として重要な役割を担い、1790年代にはイエナはカント哲学の発信地となっていた。⁽¹¹⁾ それに伴い、この機関誌は当時の知識人たちの知の震源地となっていくのである。

学問への新たな流れが生まれつつあった1789年、シラーの就任講演「世界史とは何か、また何のためにこれを学ぶのか」は、学生たちに大きな感動を呼び起こした。彼は歴史の洞察に先立ち、「勉学本来の目的そのものについて」学生たちに、次のような注意を呼びかけた。

「パンの学者が自分の前に描く勉学の計画と、哲学的頭脳の人が自分の前に描くそれとは、異なっている」⁽¹²⁾

パンの学者とは「自分の物質的な生活状態をより良くし、また、つまらぬ名誉欲を満足させるためのみであるような人」であり、断片的な知識の寄せ

集めだけで満足する人である。

それに対して哲学的頭脳の人には、断片的な知識では満足しない。

「一箇の調和的な全体に秩序づけられる」まで「己の学問の中心点」を目指し、その中心点から芸術や学問の領域を見渡せるまで満足しない人間である。すなわち、自己の知識の完成を目指しながら、つねに全体の中心に立って調和のとれた全体へ向かう人である。

シラーは学生たちに、哲学的頭脳を持って「世界の歩みの中に理性的な目的をもたらし、世界史の中へ目的論的原理をもたらし」精神を持つことが、学生本来の学びの目的であることを訴えている。⁽¹³⁾

さらにヘルバルトが入学する直前の1794年5月、フィヒテが就任し「学者の使命」の講義を行い、その前提となっている「社会における人間の使命」、さらに「人間自体の使命」⁽¹⁴⁾についての深い洞察を学生に語りかけた。フィヒテは次のように述べている。

「…人間の概念の中には、人間の最後の目標は到達されるものではなく、そこへの道は無限でなくてはならないということが含まれている…かくてこの目標への限りなき接近が人間としての、すなわち、理性的ではあるが有限な存在者、感性的ではあるが自由な存在者としての人間の真の使命である。…そこでさきの自己自身との完全な一致を、言葉の最高の意味において完全性と名づけるならば…完全性は人間の到達しがたい最高の目標であって、無限に完成していくことが人間の使命である。」⁽¹⁵⁾

フィヒテはさらに、この使命を実践していくことが学生の学びの目的であり、自分は「思索と教授」を通じて、学生たちとこの使命を共有していきたいと述べている。⁽¹⁶⁾

続けて彼は、「文化を促進し、人間性を高揚するために寄与するのを最高の目的とする」学問を目指すことを学生に呼びかけている。このフィヒテの講義は、「真理を広めること」⁽¹⁷⁾を目的としていた「自由人協会」の初期の

メンバーたちに、決定的な影響を及ぼした。⁽¹⁸⁾

こうして、1780年代後半から1790年代にかけてイエナは大きな精神運動の高揚期を迎え、学生たちはその華麗な知の巨人たちの影響のただ中にいた。

ヘルバルトが入学した1794年とは、学生たちが「パンの学者」ではなく、「哲学的頭脳」と「人間の使命」を志していく時代の転換点であった。その渦の中心に「自由人協会」(Literarische Gesellschaft der freien Männer. 以下「協会」と略記)の初期のメンバーとヘルバルトがいた。

3. フィヒテと「自由人協会」

フィヒテと「協会」との関係は、先にも触れた学生結社との対決を抜きに語ることができない。というのも、「協会」の創設は、フィヒテが学生に求めた「人間の使命」を具現化したものであったのに対して、学生結社はその理念からかけ離れた存在であったからである。

フィヒテは、イエナ大学着任直後から積極的に学生たちと交流し、「文化の高次の段階」へと彼らを引き上げるべく働きかけていた。

イエナで交流を深めた学生たちについて最も顕著に述べられているのは、フィヒテの大学改革案「エアランゲン大学の内部組織のための考案」(1805/6)である。ここには「協会」での交流と、関わった学生たちへのフィヒテの熱い思いが、大学の理想像と共に語られている。

「祖国ドイツのあらゆる個々の国家出身の青年たちのそのような力強い共同生活において—私はここで直接の経験から語っています。というのも[・][・][・]イエナに私がいたときそのような力強い共同生活が始められていたからです……このような共同生活においてひととは互いに知り合いになり、友情が結ばれます。これは、ドイツの各地に若い人が将来散っていった後も、なお生活を貫いて持続し、それを通じて青年の個人的愛は非常にしばしば国務に利益をもたらすのです。(ここでも私は経験から語っています。私は友人たちのかなり多くのそのようなサーク

ルを知っており、彼らはイエーナにおいて互いに結びついており、いまやすべてのドイツの州を通じて…一部は重要な公職に就いていて、互いに切り離されないものになっています…。」⁽¹⁹⁾

ここでフィヒテが語っているイエーナでの経験とは、「協会」で出会った学生たちとの交流である。

例えば創設の中心人物であり、後にブレーメン市長になったシュミット (Smidt, Johann, 1773-1857) や、ナポレオンの私設秘書となったペレ (Perret, Claude Camille, 1769-?)⁽²⁰⁾、外交官になったリスト (Rist, Johann Georg, 1775-1847) らを指している。⁽²¹⁾

さらに彼は知識人として成長し、自己形成を遂げつつある、かつての「協会」のメンバーだったドレスラー (Dresler, Johann Karl Jakob, 1780-1809) を高く評価し、法学教師として推薦している。⁽²²⁾

この文章は彼がイエーナを離れた後も、いかにメンバーと深いつながりを持ち続けたかを物語っている。またフィヒテにとって「協会」のメンバーとの交流は、彼自身の目指す大学の存在意義、すなわち大学が学問によって人間形成を探究する場であるという考えと深くつながっていた。

フィヒテは教授に際しても、学生に対して「教師の方から一方的に進めていく」のではなく、「交互的な話し合い」と「学問の対象について自ら発表」することで、学生との関係を築こうとしていた。⁽²³⁾

だがこうしたフィヒテの積極的な学生への意識改革の働きかけは、他方で先に指摘した学生結社との摩擦を生むことになった。

彼は当時イエーナで勢力のあった三つ学生結社に対して、自主的な解散を要求したのである。二つの結社は解散に応じたものの、過激な学生結社であるユニティステン (Unitisten) たちは、フィヒテの家を襲撃し、夫人を恐怖におとし入れた。⁽²⁴⁾ 身の危険を感じたフィヒテは、1795年春、ひとりオスマンシュタットへの避難を余儀なくされるのである。⁽²⁵⁾

このできごとは、フィヒテが学生の教育にいかに熱心であり、自らの哲学

的理念に忠実であったことを物語る事件である。「協会」の創設とフィヒテのメンバーとの交流は、他方で学生結社との対立と微妙な相関関係にあることを見逃してはならない。

フィヒテは、社会を担う学生の意識改革を「協会」の活動を通じて実現していくことをメンバーに託したのである。「協会」の初期のメンバーたち、例えばベルガーやシュミットは、まさにこの使命を担っていた。⁽²⁶⁾

彼らはこの目的を推進するために、「協会」が作成した会則の印刷許可を大学当局に求め、学生に影響力を持ちうる公的に認められる団体を目指していた。また入会にあたっては、あくまでも哲学的な論文の審査によって入会を認め、学問を通じて互いの人間性を向上させることを目的としていた。⁽²⁷⁾

会則の初めには、こう述べられている。

「あらゆる善と真理への内的な愛に満ちながら…（中略）…人間性の目的を推進していくために、また真理の普及に寄与し、その法則に普遍的な妥当性を与えるために、私たちはひとつにまとまるのである。

—真理は私たちの唯一、そして最も崇高な目標である。」⁽²⁸⁾

さらに協会の目的について、こう定めている。

「協会の目的は、真理を広めることである。諸学問の研究は、それゆえに会員の重要なとり組みである。」⁽²⁹⁾

ここには、先に述べたシラーの「哲学的頭脳」や、フィヒテの「学者の使命」のモチーフが色濃く反映されているのを見てとることができる。初期のメンバーたちは、哲学的な議論を通じて互いの人間性を高めあい、真理を探究する学問研究を通じて、学生たちの意識改革を目指したのである。

「協会」の創設がフィヒテの理念を受け継ぎ、それを公に広めていく使命を帯びていたという点で、「協会」は当時イエナで勢力を持っていた同郷人会や、過激な学生結社とは根本的にその性格を異にしている。⁽³⁰⁾

4. 議論されたテーマ ～1795年9月まで～

1794年6月に創設された「協会」は、フィヒテが無神論論争でイエナを離れるまで続いた。その活動において、「協会」の大きな転換点となったのは、1795年9月頃である。

会の創設からこの約1年の間に、「協会」の方向性をめぐって三つの転機があった。会則の印刷をめぐる大学当局とのあつれき、シュミットやベルガーら初期のメンバーの離脱、フィヒテのオスマンシュタットへの避難である。

創設当初の「協会」は、哲学的・文学的議論を通じて普遍的な人間のあり方を模索し、他の学生たちへ働きかけていこうとしていた。

けれども、公的な学生団体として認知されようとした彼らの試みは、大学当局から会則の印刷許可が出なかったことで、私的な団体としての存続を余儀なくされたのである。⁽³¹⁾

また学生結社との対立によって、オスマンシュタットへ逃れたフィヒテも、イエナに戻ってきて以来、沈静化した学生結社への関心を失っていた。⁽³²⁾

さらに「協会」を支え続けた中心人物シュミットが9月に「協会」を離れ、ベルガーを含めた初期のメンバーたちも相次いで退会し、フィヒテの理念を受け継いだメンバーがいなくなったことで、「協会」は急速に失速し始める。

その存続の中心を担ったのが、「協会」の第二世代ともいえるべきヘルバルトであった。けれども、会の方向性は外へ向かってではなく、あくまでも自身のアカデミックな自己探求にとどまるものとなっていく。

1795年9月までの議論のテーマは、私見によれば、その意味で「協会」本来の設立の理念を含むものと見ることができる。資料として1795年9月までの「協会」の会議録を以下に要約したので参照されたい。そこでは、入会と退会についての承認とともに、彼らが重視したテーマを読みとることができる。彼らの中心となった議論は、以下の五つに集約できる。

①「協会」の会則をめぐる議論

②フィヒテの「学者の使命」に触発された「協会」の使命とその連帯について

③国家、市民との関係を中心とした社会的・政治的な問題について

④友情、信頼などの人間的なテーマについて

⑤哲学・歴史・文学を題材にした人間性に関するテーマについて⁽³³⁾

彼らは、古代ギリシャ・ローマの人間像について議論し、レッシング (Lessing, Gotthold Ephraim, 1729-1781) の『賢者ナータン』を読み、普遍的な人間形成のあり方について語り合った。⁽³⁴⁾

そのほかにも、ヘルダー (Herder, Johannn Friedrich, 1744-1803)、クロプシュトック (Klopstock, Friedrich Gottlieb, 1724-1803)、ヴィーランド (Wieland, Christoph Martin, 1733-1813)、ヒッペル (Hippel, Theodor Gottlieb, 1741-1796)、ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang, 1749-1832)、シュトルベルク (Stolberg, Leopold, 1750-1819)、シラー (Schiller, Johann Christoph Friedrich, 1759-1805) らの文学者・詩人の作品をとりあげ、議論している。

彼らはシラーが述べた「パンの学者」ではなく、「哲学的頭脳」をもつ人間を目指し、またフィヒテが述べた「社会における人間の使命」と同時に、その前提となっている「人間の使命」、すなわち普遍的な人間形成のあり方を求め、哲学的な議論を重ねたのである。

5. 「自由人協会」と1795年9月までのヘルバルト

「協会」におけるヘルバルトの活動は、会議録によれば1794年10月28日から1797年3月22日までである。⁽³⁵⁾ 彼は1794年10月20日にイェナ大学に入学しており、入学直後から「協会」への活動を始めていた。

入会が認められた記録以後に、初めてヘルバルトの活動が会議録に登場するのは1795年3月12日である。そこで彼は、朗読のトレーニングについて提案している。⁽³⁶⁾

会議録を見ると、1795年2月19日にメンバーの論文提出と発表の順番がくじで決められている。ヘルバルトの発表は六番目の5月7日に行われ、スイスの田園詩人ゲスナー（Gessner, Salomon. 1730-1788）の田園詩を朗読した後、道徳性と哲学の原理についての論文を発表している。⁽³⁷⁾ 続く6月4日には、詩人のシュトルベルク（Stolberg, Friedrich Leopold, 1780-1819）⁽³⁸⁾ のギリシア悲劇の一部を朗読している。

その直後、まさに「協会」が転換期を迎えていた1795年8月28日、友人ハーレム（Halem, Gerhard Anton von, 1752-1819）⁽³⁹⁾ への書簡で、彼は自らの学問的状況について次のように述べている。

「肉体と精神のある種の無気力さから、私は次第に目覚めつつあります。

私がここ（イエナ）にやってきてから、私の（学問への）取り組みは…大きく変化してきています。知識学は、無限の自我の場所を確保するために、はかりしれない空虚さを私の頭に作り出しました。」⁽⁴⁰⁾

続けて彼は、知識学の壮大さに敬意をはらいながらも、次第にフィヒテの知識学に疑問を感じ始めていることを告白している。⁽⁴¹⁾

書簡の最後では、自ら抱えた哲学的苦悩を、今後美的な学問と数学の研究を深めていきながら、学問を包括的に見る視点を確保したいと述べ、ハーレムに助言を求めている。

フィヒテの影響が薄れ、創設に関わった初期のメンバーたちが去り、「協会」がその活動の転換点を迎えていた夏から秋にかけて、ヘルバルトもまた自らの学問的原点に立っていた。

やがて、この1795年9月以降、ヘルバルトはフィヒテの自然法、シェリング哲学についての論文を「協会」で発表し、創設メンバーが抜け求心力を失った会のリーダー的存在となっていくのである。

<資料：1795年9月までの会議録> ⁽⁴²⁾

年月日	議論のテーマ
1794年 6月18日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベルンホフの論文「古代と現代の偉大さの特徴について」の朗読によって会が開始された。 2. 協会の会則が読みあげられ、承認された。 3. ペサロヴィウスの論文「協会における若者たちの、今日の時代において次第に明らかになってきた自由について」が朗読された。
6月25日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベルガーが会員に普遍的な人間の使命について呼びかける。会員はそのために集い、活動することを呼びかけた。 2. クリュエーガーが、レッシングからヴィーラントへの書簡を朗読した。
7月2日	<p>リンダーが「ギリシアを旅する若きアナカルシス」の中にあるテルモピレーの闘いの叙述を朗読した。</p>
7月9日	<ol style="list-style-type: none"> 1. リンダーの論文「人間の生み出すものと自由について」を朗読する。 2. シュテッグマンは、「ギリシア人がオリンピック大会において抱いていた関心について」を朗読した。 3. クリュエーガーは、レッシングの戯曲『賢者ナータン』を朗読する。
7月16日	<ol style="list-style-type: none"> 1. マイスターは「人間の使命について」の講義を朗読することから始めた。 2. ベルガーは、ヒッペル ⁽⁴³⁾ の「自然のスケッチ」、マイスターはシラーの文芸誌『ターリア』に掲載されている「レオニダスの別れ」を朗読した。 3. ベルガーは協会に対して、フィヒテによって提案された協会の会則の変更点を公表し、承認された。
7月30日	<ol style="list-style-type: none"> 1. メラーは、ヘルダーの「人間性の促進に関する書簡」の講義によって会議を始めた。 2. 会議を機能的に運営していくために、新たな会則の追加が提案された。 例えば、議論のテーマについては、実践哲学を中心とすることなどである。
8月6日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベレが、「国家の没落」という講義で会議を始めた。 2. ベルンホフの提案したテーマ「エゴイズムについて」について議論する。 3. プロイニングの受け入れについて投票が行われた。
8月13日	<ol style="list-style-type: none"> 1. プロイニングが会員として参加した。 2. ペサロヴィウスが、論文「喜びと苦しみについて」を朗読する。 3. リンダーが、論文「真の生の喜びについて」を取り上げ、議論する。 4. ベルガーが、「生得的な国家憲法を改善するための国民の義務について」を取り上げ、議論する。

8月20日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ペーターゼンが、「人間認識について」という論文を朗読する。 2. 「愛国心」について議論する。
8月26日 (臨時会議)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入会許可に関しての合意事項を確認した。 2. 協会の会則の改正について、3名を選出することを決定する。
8月28日 (臨時会議)	<p>会則改正の審査メンバーに、ベルンホフ、ベルガー、ブロイニングが選ばれる。彼らは聖ミカエル祭前の会議までに、改善された会則の構想を提案することを約束した。</p>
9月4日	<ol style="list-style-type: none"> 1. フィヒテが会議に参加する。⁽⁴⁴⁾ 2. ベルガーの論文「国家の概念について」が、議論される。 3. ブロイニングの論文「秘密協会」が朗読される。 4. ペレがベルガーの意見に賛同し、「市民的罰則は、ただ契約によってのみ正当化されるべきである」と述べる。
9月17日	<ol style="list-style-type: none"> 1. メラーの論文「秘密協会について」が朗読される。 2. クリュウガーの論文「あらゆる使命の理念と人間の最終的な願望との連帯について」が朗読される。
9月22日 (臨時会議)	<p>ベルンホフ、ベルガー、ブロイニングによって構想された協会の会則が提出される。</p>
9月29日	<ol style="list-style-type: none"> 1. シュテックマンは、次のようなスピーチで会議を始めた。 「一体どのようにして、人は真理への本来的な衝動を目覚めさせ高めていくべきなのか」 2. ベサロヴィウスによる「国家の罰則の合法性」のテーマが議論された。
9月30日 (臨時会議)	<p>ベルガーが協会を離れる。</p>
10月28日 (臨時会議)	<p>次の会員の受け入れが認められる。クラマー、ケッペン、ウルプレヒト、ヘルバルト、トゥリッペン。</p>
11月5日	<p>ベルンホフが論文「改革者の性格について」を朗読した。また彼は、次の命題を擁護した。「自然法のテーマは、広げられるべきである」。</p>
11月12日	<p>ブロイニングの論文「革命と改革について」が朗読される。</p>
11月26日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ホルンの論文「自由人協会の本質について」が朗読される。 2. ヘルバルトとケッペンの論文が吟味され、承認される。
12月4日	<ol style="list-style-type: none"> 1. クリュウガーは、論文「利己主義の専制政治について」を朗読する。 2. 新しいメンバーであるヘルバルトとケッペンが紹介される。 3. ベルンホフは、論文「ストア学派とエピクロス学派の幸福について」を朗読した。 4. 新しい会則が、協会で朗読される。

12月11日	<ol style="list-style-type: none"> 1. リンドナー「天才について」を論じる。 2. メラー「あらゆる時代の専制政治の歴史について」 3. 新しい会則に署名を行う 4. 会則の起草に関して多大の貢献をしたベルガーを記録することを決定する。
12月18日	<p>トゥリッペン「学者また市民としての活動すべき義務について」 「歴史の新しい区分について」論じる。</p>
1795年 1月29日	<ol style="list-style-type: none"> 1. シュミット「祝祭を行うことについて」論じる その際、次のような提案を行った。二ヶ月ごとにパーティを行い、協会について欠けていること、良くなっていることを語り合うというものであった。シュミットのこの提案は受け入れられた。 2. コペンハーゲン出身のローゼン克蘭ツ、ブラウンシュヴァイク出身のホルン、リーフランド出身のライマーズが、新しいメンバーとして提案された。 3. メラーは、ローゼン克蘭ツの審査論文「決闘について」を朗読した。 4. ブロイニングは、ベルンホフの論文「ストア学派とエピクロス学派の幸福について」に論評を加えた。 5. 協会は、会員のペーターゼンを会への関心が失われたとして、除名することを決定した。
2月5日	<p>シュミットは、提出されたホルンの審査論文「どのようにして人間の目的の達成への不運が避けられるのか」に目を通し、認められた。</p>
2月10日 (臨時会議)	<p>ベルンホフは、ライマーズの審査論文「若きブルータスの人格形成」を朗読した。全会一致で入会を認められた。</p>
2月14日 (臨時会議)	<ol style="list-style-type: none"> 1. シュミットが「協会の欠陥とその目的に合致した特徴、その改善について」を朗読した。 2. トゥリッペンは口頭で次のような講義を行った。「我々の協会における、その欠陥一般の連帯精神について」 3. 会議が終わったあとで、クリューガーは会のために自ら作曲した歌を贈り、会員で歌った。
2月19日	<ol style="list-style-type: none"> 1. マイスター「太古の時代の偉大な人間への回想の影響について」 2. ベルンホフ「スイス同盟の設立描写」を朗読した。 3. ブロイニング「マイスターの修業時代」から、詩人の性格描写について朗読した。 4. リンダーは、ダンツィッヒ出身のカウフマンを新しい会員に加えるように提案した。 5. 会は、混乱と増加ゆえに定例の論文の順番に関して、新しい会員を加えて、新しい抽選による割り振りを行うことを決定した。論文はこのくじによって提出される。

2月26日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベルンホフは「歴史的な生き生きとした記述の純化について」というスピーチで会を始めた。 2. ブロイニングは、口頭で「今日のフランス文化の一面性について」論じた。 3. ブロイニングは、論文「市民法の改良について」を提出した。 4. カウフマンの入会について投票が行われ、全員一致で承認された。
3月5日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ブロイニングは「国家と教会の成立について」論じた。 2. クラマーは「人間の相互の信頼について」論じた。 3. ブロイニングは「ゲーテのタッソーに関する覚え書き」を提出した。
3月12日	<ol style="list-style-type: none"> 1. クラマーは、論文「精神の偉大さについて」を朗読した。 2. ヘルバルトは、次のような疑問に答えようとした。 「朗読がおおぎなりにされている場合には（どうすればよいのか）」 同様に、彼は会に朗読のトレーニングを提案した。 3. カウフマンの論文「人格の確かさについて」が朗読され入会が認められた。 4. クラマーは、パスカルの論文を朗読し、論評を加えた。
3月19日	<ol style="list-style-type: none"> 1. クラマーは退会のスピーチを行った。
5月27日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは論文「道德性の叙述について」を朗読した。 2. ヘルバルトは、ゲスナーの田園詩を朗読し、定例論文である「哲学の諸原理について」提出した。道德性の叙述について、会員から多くの問題が議論された。 3. ブラウンシュヴァイク出身のシュピーゲルの入会が提案され、全員一致で承認された。
6月1日 (臨時会議)	シュピーゲルの入会審査論文「外的な、法的な国家における自由について、とりわけフランスの場合」がホルンによって朗読され、全員一致で入会が認められた。
6月4日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ケッペンが口頭で「真の友情の希少性」について論じた。 2. ヘルバルトはシュトルベルクのギリシア悲劇の一部を朗読した。
6月11日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ケッペンは論文「人が理念のために活動し始めるとすぐに理念を忘れることの必然性について」を朗読した。 2. カウフマンは口頭で「祖国への初期民族の原因について、それがもう作用していないことについて」論じた。 3. ケッペンは「芸術家の理念について」論じた。 4. 会では、次のことが決議された。 提出された論文の記録とともに、口頭での話し合いも記録に残すこと。またその記録には、話し合いのテーマと結果も含むこと。

6月19日	1. カフウマンが論文「行為の自由による自己思考の欠陥の影響について」を朗読した。 2. クリューガーは、次の二つのテーマについて提案し、議論した。 ①君主制あるいは、民主制どちらがよいのか ②君主制において、議会はひとつあるいは二つのどちらがよいのか 3. シュミットは、ウェストファーレン出身のフローレートを新しいメンバーとして紹介した。
6月26日	1. 会員全員で、会の創設記念日を祝った。 2. デンマーク出身のメラーが退会した。 3. 会から離れていたベルガーが、再び会に入会した。
7月2日	1. ペサロヴィウスは論文「文学について、それ以外の造形美術に配慮して」を朗読した。 2. ライマーズは論文「人間性の研究について」を朗読した。 3. ケッペンはクロプシュトック ⁽⁴⁵⁾ の詩を朗読した。 4. ライマーズは、会のメンバーにクーラント出身のバーレンドルフを提案し、全会一致で承認された。
7月9日	ライマーズは論文「連帯精神について」を朗読した。
8月13日	バーレンドルフの入会審査論文「ドイツ文化への大学の影響について」が朗読され、入会が認められた。
8月20日	1. ベルガーが再び会を離れる。 2. ケッペンは口頭で「口頭での講義の困難性について」を行った。 3. ライマーズはクロプシュトックの詩を朗読した。 4. バーレンドルフが、会に初めて参加した。
8月27日	1. フローレートは論文「女性の市民法について」を朗読した。 2. シュビーゲルは論文「信仰について」を朗読した。 3. ケッペンは論文「友情と愛」を提出した。
9月10日	ベルガーの書簡の回答をシュミットに依頼した。
9月17日	1. シュミットはベルガーの書簡への回答を朗読し、保管した。 2. バーレンドルフは論文「友情の希少性について」を朗読した。

<註>

(1) J. Fr. Herbart's Sämtliche Werke, hrsg. von K.Kehrbach, O. Flügel u. Th. Fritzsche, 19Bde., Langensalza 1887-1912, 2 Neudruck Aalen 1989, K. 16-S. 9.
本論文中、引用及び参照したヘルバルトの論文は、すべて上記の全集による。またその末尾に全集の略号 (K), 巻数, 頁数を示す。

(2) 小領邦四カ国とは、エルネスト系ヴェッティン家 (Ernestiner Wettiner) のザ

クセン・ヴァイマル、ザクセン・ゴータ、ザクセン・コーブルク、ザクセン・マインゲンである。ゲーテは、ザクセン・ヴァイマル公国の枢密顧問官として、イエナ大学興隆に貢献した。このあたりの事情については、例えば以下の文献が詳しい。

杉浦忠夫「ゲーテとシラーと1803年イエナ危機～大学史の視点から～」東京教育大学「影の会」『影』46, 2004年, 44～51頁。

- (3) フリードリヒ・クリスティアン・ラウクハルト著, 上西川原 章訳『ゲーテ時代のひとつの断面—自伝「人生の有為転変」』三修社 1994年, 84頁。ヴァイマル公とは、カール・アウグスト (Carl August, 1757-1828) である。これについては、同書341頁の註(72)を参照。なおラウクハルトのこの証言は、シュミットの感想と一致している。拙稿「『自由人協会』とヘルバルト(2)—創設と入会—」神戸市外国語大学研究会『神戸外大論叢』第59巻 第3号, 2008年9月, 60頁参照。

- (4) 杉浦忠夫「シラーとイエナの学生反乱」『明治大学教養論集』405号, 2006年, 55頁。

- (5) ラウクハルト, 前掲書, 70頁。

- (6) ラウクハルト, 前掲書, 94頁。

- (7) 北原博「大学都市イエナと秘密結社」大阪市立大学大学院文学研究科都市文化センター『都市文化研究』1号, 2003年, 42-43頁参照。

イエナの学生が起こした騒動については、例えば次の論文を参照。

杉浦忠夫「シラーとイエナの学生反乱」, 43-66頁。

- (8) 当時の大学、学生結社の状況については、以下の文献でも指摘されている。

マックス・フォン・バーン著, 飯塚信雄ほか訳「第六章 学校教育」『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社, 1984年所収, 253-260頁。

佐澤安廣「ドイツ学生団の系譜—ランツマンシャフト—」『尚絅短期大学研究紀要』20 1988年, 33-43頁。

また、ドイツの学生結社に関する包括的な歴史研究については、以下の文献を参照。

菅野瑞治也「ドイツにおける「学生結社」に関する文化史的考察(1)～(5)—ドイツ的なものを求めて—」京都市外国語大学『研究論叢』第XLI号(1993), 第L号(1997)第LIII号(1999), 第LIV号(1999), 第VIII号(2001)参照。

- (9) ラウクハルト, 前掲書, 224頁。

- (10) 杉浦忠夫, 前掲論文, 2004年, 44-46頁。

- (11) 「一般文芸新聞」の創刊とカント哲学の普及については、以下の文献が詳しい。

田端信廣「『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動」同志社大学人文学会『人文學』第159号, 1996年, 36-83頁。

田端信廣「(研究ノート)『一般文芸新聞』の最初の十年」同志社大学哲学会『哲学論究』第12号, 1996年, 1-44頁。

- (12) シラー著、新関良三訳「世界史とは何か、また何のためにこれを学ぶか」新関良三ほか訳『シラー』筑摩書房、1959年所収、94頁参照。
- (13) シラー、前掲書、1959年、104頁。石崎宏平『イエナの悲劇』丸善 2001年、14-15頁。
- (14) J.G.Fichte:Über die Bestimmung des Gelehrten,in.:Gesamtausgabe der Bayerischen der Wissenschaften I, 3: J. G. Fichte, : Werke, 1794-1796, hrsg von R. Lauth u. a., Stuttgart-Bad Cannstadt 1966, S. 27.
邦訳「学者の使命に関する数回の講義」(1794) 隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集・第22巻 教育論・大学論・学者論』哲書房 1998年所収、7頁。
- (15) J. G. Fichte I, 3: Werke, 1794-1796, 1966, S.31-32. 邦訳、前掲書、14頁。
- (16) J. G. Fichte I, 3: Werke, 1794-1796, 1966, S.32. 邦訳、前掲書、15頁。
- (17) Abschnitt VI. Von den Litterarischen Arbeiten der Mitglieder § 1, (in:Constitution der Literarischen Gesellschaft zu Jena 1795), in:Marwinski,F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...“ “Aus der Geschichte der Literarische Gesellschaft der freien Männer von 1794/99 zu Jena, Jena und Erlangen 1992., S.135.
- (18) 特に影響を与えたのは、シュミットとベルガーである。拙稿「『自由人協会』とヘルバルト(2)―創設と入会―」、61-65頁参照。
- (19) J. G. Fichte: Ideen für die innere Organisation der Universität Erlangen, in: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften II, 9: J. G. Fichte, : Nachgelassene Schriften 1805-1807, hrsg von R.Lauth u. a., Stuttgart-Bad Cannstadt 1993, S.366-367.
邦訳「エアランゲン大学の内部組織のための考案」(1805/1806) 隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集・第22巻 教育論・大学論・学者論』哲書房 1998年所収、87-88頁。
この改革案は、フィヒテの大学論の基本的な考えをまとめた初期のものである。
フィヒテの大学の理念については、以下の文献を参照。
梅根悟・勝田守一監修／フィヒテほか、梅根悟訳『大学の理念と構想』(世界教育学選集53) 明治図書、1970年参照。
- (20) フリットナーは、ベレが祖国フランスヘドイツ観念論を紹介し、フンボルトと哲学的議論したことを指摘している。
Vgl. Flitner, Wilhelm.: August Ludwig Hülsen und der Bund der freien Männer, in: Wilhelm Flitner Gesammelte Schriften, Bd.5 1985, S.467. Anm. (293) またベレについては、シュミットの証言がある。
Smidt, J.: Erinnerungen an J. F. Herbart von J.Smidt, 1842, K.1-S. XX VII .
- (21) アカデミー版の全集の註では、註の解説で以下のメンバーの名前が取り上げられている。ブレーメンのホルン (Horn), スイスのフィッシャー (Fischer), マイ (May), シュテック (Steck), ボンのプファイファー (Pfeiffer), ナッサウ

のドレスラー (Dresler), ロシアのペサロヴィウス (Pesarovius), ライマース (Reimers) である。

J. G. Fichte: Ideen für die innere Organisation der Universität Erlangen, 1805-1807, S.366.

邦訳「エアランゲン大学の内部組織のための考案」(1805/1806), 527頁の註(11)を参照。

- (22) 彼は「協会」のメンバーであった。Raabe の記録によれば, 1795年2月27日に「協会」に入会している。フィヒテは, 1802年の書簡で「私がイエナで教えていた学生で出会った中で, 素晴らしい頭脳を持った学生の一人です。」と述べている。

Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer in Jena 1794-1799, in: Festgabe für Eduard Berend zum 75. Geburtstag am 5. Weimar 1959, S.380.

- (23) J. G. Fichte: Ideen für die innere Organisation der Universität Erlangen, S.360.

邦訳「エアランゲン大学の内部組織のための考案」(1805/1806), 80頁。大学が, 学問によって人間形成を探究する場であるという考えは, フィヒテの一貫した考えであった。例えば以下の文献を参照。

フィヒテ, 隈元忠敬訳「学者の使命に関する五回の講義」(1811) 隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集・第22巻 教育論・大学論・学者論』, 331-398頁。

- (24) ユニティステンについては, ラウクハルトは次のように述べている。

「結社の悪弊はハレ大学をも毒していた。特に当時は<不変団 (コンスタンティステン) ><一体団 (ユニティステン) >が活発で…大学である種の指導的優位性を占めようと努めていた。」ラウクハルト, 前掲書, 194頁。

ユニティステンとコンスタンティステンの成立については, 以下の文献を参照。

菅野瑞治也「18世紀後半におけるドイツの学生結社オルデンとランツマンシャフトの共生的関係について」京都外国語大学ドイツ語学科『Brucke』(11), 2008年, 43-58頁。

- (25) フィヒテと学生結社とのあつれきについては, 以下の文献を参照。

フリッツ・メディクス著, 隈元忠敬訳『フィヒテの生涯』, 隈元忠敬, 井戸慶治訳『フィヒテ全集 補巻』哲書房, 2006年所収, 245-253頁。石崎宏平, 前掲書, 88-94頁。

マックス・フォン・ベーン著, 「第三章 迷信」, 前掲書, 136頁。

- (26) 拙稿「『自由人協会』とヘルバルト(2)―創設と入会―」, 61-65頁。

- (27) 入会と退会については, 会則で明記されている。

Vgl. Abschnitt IV. Von der Aufnahme neuer Mitglieder, und ihre Vertheilung in besondre Versammlungen, dem Austritte, und der Ausschiessung alter

Mitglieder. in: Marwinski, F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...“, S.129-132.

(28) Vgl. Von der Gesellschaft überhaupt : § 1 (in: Constitution der Literarisch-
en Gesellschaft zu Jena 1795), in: Marwinski, F., S.112.

(29) Abschnitt VI. Von den Litterarischen Arbeiten der Mitglieder § 1, in: Mar-
winski, F. S.135.

(30) 「協会」の歴史的な位置づけについては、以下の文献を参照されたい。

例えば「協会」と、後のブルシェンシャフト運動の関係についての指摘も、研究
者によって指摘されている。マルヴィンスキーは詳細な分析に基き、「協会」に
見いだされる道徳的な規範意識が、後のブルシェンシャフト運動にも見いだすこ
とができるとして、「協会」の活動をドイツ学生結社の歴史の中で位置づけている。

Vgl. Marwinski, F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...“, S.107-108.

またクレヴィツシュも、「協会」が18世紀の学生の大学改革運動の中にあって、
市民的・啓蒙主義的な教育と人間形成の意図を持った特別な位置を占めていると
し、後のブルシェンシャフト運動につながっていると指摘している。

Vgl. Krebisch, A.: Die Gesellschaft der freien Männer zu Jena, in: Zwischen
Geheimnis und Öffentlichkeit, Jena 1991, S.278.

「協会」がフリーメーソンの影響を受けていたことについては、以下の文献を参照。

Vgl. Krebisch, A.: Die Gesellschaft der freien Männer zu Jena, 1991, S.264.

Marwinski, F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...1992, S.14.

(31) 大学当局に、会則の印刷許可が下りなかった経緯については、以下の文献が詳
しい。

Vgl. Marwinski, F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...1992, S.38-58.

Krebisch, A.: Die Gesellschaft der freien Männer zu Jena, 1991, S.256-258.

またマルヴィンスキーは、大学当局から「印刷許可が与えられた」というアスム
スに対して、その事実はないことを指摘している。

Asmus, W.: Johann Friedrich Herbart Eine pädagogische Biographie. I. Teil:
Der Denker (1776-1809), 1968. Heidelberg, S.76-80.

Marwinski, F.: „Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...1992, S.56, Anm.106.

(32) Krebisch, A.: Die Gesellschaft der freien Männer zu Jena, 1991, S.269.

(33) クレヴィツシュは、1799年までの会の活動全体を概観しながら、議論のテーマ
を次の三つに分類している。哲学あるいは文学における普遍的な人間のあり方を
追究した人間性の問題は、「協会」の一貫したテーマであった。

1. 哲学的・歴史的・政治的テーマ
2. 文学的・美的テーマ
3. 倫理的・社会的テーマ

Vgl. Krebsch, A.: Die Gesellschaft der freien Männer zu Jena, 1991, S.261.

- (34) レッシングは、18世紀のドイツ啓蒙主義の代表的思想家・批評家である。『賢者ナータン』(1779年)は民族・宗教の違いを越えた人間のあり方を探究した作品である。レッシング、大庭米治郎訳『賢者ナータン』岩波書店 1927年参照。

坂本恵『賢者ナータン』『坂部恵集2』岩波書店、2006年所収、303-314頁参照。

- (35) 1797年3月22日の会議録によれば、この日ヘルバルトは「協会の遺産について」を朗読し、将来の「協会」のプランを提示し、仲間と共にスイスへ旅立っている。この日、会を支えた多くのメンバーがイエナを離れている。ヘルバルトのほかには、彼とともに「協会」を支えてきたペーレンドルフ、スイス人のシュテックとフィッシャー、カウフマンとムアベックである。Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer in Jena 1794-1799, S.369-370.

書簡によれば、4日後の3月26日にスイスへ旅立っている。Vgl. K. 16-S.53-54.

- (36) ただ、この提案の具体的な内容については、資料は残されていない。Vgl. Raabe, P., S.356.

- (37) ゲスナーは、スイスの田園詩人であり画家である。Vgl. Allgemeine Deutsche Biographie, Duncker & Humbolt 1879, Bd.9, S.122-126. 具体的にどのような内容かは明らかではないが、この時期ヘルバルトは、知識学の影響を受けて、道徳あるいは哲学の根本的な問題に取り組んでいたようである。この日の会議で、2月26日から7月8日までの14名の論文提出の順番が決められた。Vgl. Raabe, P., S.356.

- (38) シュトルベルク (Stolberg, Leopold, 1750-1819) は、ドイツの詩人、翻訳家、弁護士。Vgl. A.D.B, Bd. 36, S.350-367.

- (39) ハーレムはヘルバルトの祖父の生徒であり、ヘルバルトの家族と親交があった。彼は、法律家、詩人などの多彩な顔を持った知識人であり、「一般文芸新聞」にも何度か投稿し、掲載されている。Vgl. Allgemeine Deutsche Biographie, 1879, Bd. 10, S.407-409.

- (40) K.16-S.9.

- (41) K.16-S.9~10.

- (42) この資料は、Paul Raabe によって、再発見されたものである。掲載した会議録は、1794年9月17日までのものを筆者が要約した。

Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer in Jena 1794-1799, in: Festgabe für Eduard Berend zum 75. Geburtstag am 5.Weimar 1959, S.336-383.

- (43) おそらくベルガーがとり上げたヒッペルとは、ドイツの政治家、作家、社会批評家であったテオドル・ゴットリーブ・フォン・ヒッペル (Hippel, Theodr Gottlieb, 1741-1796) である。Vgl. A. D. B, Bd.12, S.463-466.

- (44) 会議録によれば、フィヒテが「協会」に出席したのはこの一回だけである。Vgl. Raabe, P., S.336-383.
- (45) クロプシュトック (Klopstock, Friedrich Gottlieb, 1724-1803) は、ドイツの文
学者、詩人。古代ギリシア語の詩形をドイツ語の抑揚に移し、数々の頌歌（オー
ド Ode）を作った。ドイツ近代文学の最初の国民詩人である。Vgl. A.D.B, Bd.
16, S. 211-226. 「協会」のメンバーの中で、彼の作品は最も多く取り上げられて
いる。